



「鐘」

2007~08年、縦333.3㍍、横745.5㍍

遠藤彰子展

④

注目の6作品

遠藤彰子さんが還暦を迎えた2008年に完成した1500号の大作である。本作と対峙した時、鑑賞者は横7㍍を超える巨大さによってもたらされる量感と、詳細に描き込まれたおびただしい数のモチーフに圧倒されるだろう。パノラマ状に広がる原野には、動物や植物、人物がひしめき合い、一見ただけではその全容を把握することは困難だ。しかし、画面右側上部から中央にかけて大きく表された円卓と、そこから滑り落ちていく食材や人々が、本作の内容を追う手がかりとなる。

遠藤さん自身、これまでに多くの場で言及しているが、本作のテーマは「食」である。「鐘」というタイトルは、饗宴の始まりを告げるものという意味を込めて付けられた。食事は生命を維持するために不可欠な行為だ。一方で、それはある命を永らえるために別の命を奪う行為であり、時には格差や争いの原因にも

「食」を通じ循環する命

なりうる。遠藤さんは生と死の両義性をもつ「食」を哲学的なまなざしで捉え、食べるという行為を通じて循環し続ける命の営みを、壁画のような大画面のなかで表現したのである。

大作を描くことについて、遠藤さんは「大構図には、誰にも変えられないような大きな物語を示し、細部には個々の人生のような小さい物語を描いている」と語っている。本作においても、幾千という人物たちが宴に興じる姿が、遠景で小さく描かれている。会場ではぜひ名もなき彼らに視線を向け、時間をかけてじっくりと、それぞれの物語に思いをはせてほしい。（黒沢匠・山形美術館主任学芸員）

「遠藤彰子展 巨大画で挑む生命の叙事詩」（主催・山形新聞、山形放送、山形美術館）は8月27日まで、山形市の山形美術館。中学生以下は土曜日と、日曜日午前中の入館無料。